
どこかの国の物語

神木 輝羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこかの国の物語

【Nコード】

N1639K

【作者名】

神木 輝羅

【あらすじ】

どこか遠い世界にとある国があった。

人々の人生が交じり合いながら世界は廻る

これはそんな世界で生きた女達の物語…

1章 強かなる騎士（前書き）

初めての投稿です。

変なところもあるかもしれませんが、寛大な心を持ってお読みください。

1章 強かなる騎士

私、ライトは軍人だ。父がそうだったから、あたりまえのように十代のうちに軍人になった。

皆、私のことを「実力があつて信頼できる」なんて言うけど、まったくそんなことは無くて、ただ剣術だけは少し自信はあるけれど…そんな私は、数年前からこの国の姫の側近を勤めていた。

「紅茶もまともに淹れられないなんて、あなたクビよ」

姫が、怒鳴りながらそう言った。

また一人メイドがクビになった。

「ライト、代わりのお茶を淹れてきて頂戴」

「かしこまりました」

しばらくして、ライトが淹れてきた紅茶を満足そうに飲んだ。そして一つため息を吐いてからこう言った。

「まったく、使えない奴等ばかりね。皆あなたみたいに優秀だったらいいのに。ねえ、ライト」

にこやかに笑う彼女に、ライトも笑顔で返す。

この城の姫は、気に入らないことがあるとすぐに人をクビにする、無知でわがままな人だった。そんな彼女の唯一のお気に入り、側近のライトだった。誰も彼女がライトに対して文句を言っているのを見たことが無かった。

この城の人間は姫様のことを避けていた。気に入らないことがあるとすぐにクビにする彼女に下手に関われば、自分の職が危ういからだ。だからせめて、側近である私だけは彼女のそばにしよう。最後の、最後まで彼女に仕えよう。この職に就いたときから、そう心に決めていた。

ある日のことだった。ライトは国王に呼び出された。

「ライト、お前にはこれから小隊を率いて国境の戦場に行ってもらう」

王の言葉を聞いてライトは叫びそうになった。

「っ：しかし、姫様の側近としての務めは：」

「そのことなら心配ない。これは娘が言い出したことだからな」

ライトは、全身の血の気が引いていくような気がした。

元々、この国は隣国と仲が悪かった。そして、些細なことがきっかけで戦争となった。しかしそれも今となっては無意味な消耗戦。多くの兵士が命を落とし、国境の戦場は今、最も危険な場所。行けば、生きては帰って来られないだろう、と言われる場所。そんな場所に、これからライトは向かうのだ。

ライトは、姫のもとへ向かった。もうきつと会えないだろうから別れの挨拶を告げるためにだ。

「お父様から話を聞いてきたのね」
姫は会うなりそう言ってきた。

「はい、明日この城を発ちます」
すると姫は笑顔で語りだした。

「そう、ライトが行くんだからこの戦い勝ったも同然ね」
そう言う彼女見て、ライトは思った。

「まったく、隣の国相手に勝てないなんてこの国兵士は何をして
いるのかしら」

ああ、そうかこの人は、

「さっさと勝利して早く帰ってきてね」
何も知らないんだ、

「私、待ってるから」

あの場所に行くということが、

「ねえ、ライト」

何を意味するのか、と。

次の日、ライトは小隊を率いて城を出た。戦場に向かう前、手前
の街で一晩泊まることにした。それは最後の平和な時間だった。
この街は商業が盛んでなかなか賑やかだった。たまたま通りかか
った広場でライトは足を止めた。そこで一人の踊り子が舞を踊って

いたのだ。彼女はこの街で評判の踊り子らしい。その舞う姿はとても美しく、観客は皆、見惚れていた。それを見てライトはふと考えた。

軍人にならなかつたら違う人生もあったのだろうか、と。

幼い頃から軍人なることだけを考え、他の人生など考えたことが無かった。今まで生きてきて自分はあるな風に美しい服を着たことは無い。どうせなら、一度くらいはあの踊り子のように女らしく生きてもよかつたのではないだろうか。でも、今更そんなことを考えても仕方が無いことだ。そう、今更なのだ：

ライトはもう一度踊り子に目を向けた。くると美しい舞を見せる彼女を少しばかり羨ましく思った。彼女はくると、踵を返すとそのまま二度と踊り子の方を向かなかった。

次の日、私たちは等々戦場にたどり着いた。火薬と鉄の臭いで鼻が曲がりそうだった。

剣を片手に戦場を駆け抜けた。気が付けば味方は誰も居なくなり、独りになっていた。だが、たとえ一人になつたとしても戦い抜こうと思った。それが国のため、姫様のためだ。向かってきた敵を剣で切りつけた。もう、こんなことをどの位の間続けているだろう。疲れが見え始めたときだった、油断した。銃声が聞こえた、と思ったと同時に強烈な痛みに襲われた。撃たれたのだ。そのまま、その場にくずれ落ちた。

地面に横たわりながら空を見上げた。もうすぐ自分の命が終わることくらい分かった。だが、そんな時でさえ頭の中にあっただのは姫様のことだった。

あの方はこれから、どうしていくつもりなのだろう。もうあの城には、彼女のことを心から想ってくれる人は誰も居ない。姫様はそのことにさえ気づかないかも知れないけど……。最後まで貴女を守りたかった。しかし私はもう、貴女のもとへ帰ることも出来ません。きつと待っていてくださるのに。でもこの体はもう動かないんです。段々、体の感覚が失われていった。微かな声が聞こえた。

「……ねえ、ライト……」

姫様に呼ばれた気がした。

幻聴だ。

目を閉じながら唱えた。声にならない言葉を。

姫様、私は貴女に仕えられたことを誇りに思います。

さようなら、大切な人……。

昔々、とある国にとても強い女騎士がおりました。彼女は仕えた姫のこと誇りに思い、命が尽きるその時まで想い続けました。

そんな、彼女の名は………ライト。

1章 強かなる騎士（後書き）

まずは、1章終了です。いかがだったでしょうか？
よかったら2章もどうぞ。

2章 麗しの舞姫

私、エリザベートは踊り子だ。「エリー」という愛称で、ある商業の街の広場で毎日、舞を踊っている。決して裕福な暮らしではなかった。両親は数年前に亡くなり、私が働かないと生活できないような状況だ。けど、妹と二人で暮らしていくだけなら充分やっていった。

「ごほっごほっ」

「大丈夫？お姉ちゃん」

盛大に咳き込むエリーに妹が心配そうに尋ねた。

「無理はしないでね。お姉ちゃん、体弱いんだから」

「ええ、わかってる。でも、仕事をしないと生活できないんだから」

そう言っただけで無理やり笑うエリーを見て、妹はしょんぼりと落ち込んだ。

「ごめんね。私がつと稼いでこれたらよかったのに…」

「アナタが気にすることじゃないわ。それに、私を待っているお客さんが居る限り休むわけにはいかないの」

もう一度だけ優しく微笑んでからエリーは仕事に出かけた。

私は、生まれたときから体が弱かった。だからずっと病院通いを続けている。

そして実は、妹にも秘密にしていることがある。

…私の命はもう長くない…

医者が言うには、長くて一年、だそうだ。でも心配をかけたくないからずっと黙っていた。それに、最後まで普通の人のように生きていたいから仕事も続けていた。

いつもの様に広場で踊っていたときだった。広場の隅のほうに軍人が立っているのがエリーの目に留まった。凜とした姿、カッコいい女性だった。そして、思った。

軍人なんて私は一生なれない職業だ、と。

体が弱い自分には一生無縁だ。体が丈夫な人を羨ましく思う気持ちはある。もし健康だったら違う生き方が出来ただろう。幼い頃から「お前は長く生きられないだろう」と言われ続けてきた。どうせ長生き出来ないのなら、もっと無茶な生き方をしてもよかったのではないだろうか。しかし、そんなことを言っただって、もう無駄なこと。そう、無駄なこと…

もう一度、軍人が居た方に目を向けたがそこにはもう彼女の姿はなかった。

ある日のことだった。舞を踊っている途中でエリー倒れたのだ。すぐさま病院に運び込まれた。気が付いたときには目の前に今にも泣き出しそうな、妹の顔があった。

「お姉ちゃん！どうして言ってくれなかったの」

ああ、そうかこの子は知ってしまったのだ。私の寿命のことを。

「これからは私が今までの倍働くから、だからお姉ちゃんはどう仕事しないでね」

必死そう言ってくる彼女にたいしてエリーは首を横に振った。

「いいえ、退院したらまた働くわ」

すると、妹はどうとう泣き出してしまった。

「どっとうしてえ？お姉ちゃん、このままじゃ本当に死んじゃうよう」

「ねえ、聞いて。私は今までいろんなことを我慢して生きてきたわ。どうせ助からない命なら最後ぐらい自由に生きてみたいの。お願い」

酷な願いだと解っている。たった一人の家族が死に急ぐのを認めろというのだ。それでもコレは譲れない。

しばらく考えた彼女は、弱々しい声で「：うん」と一言だけ告げた。

退院してからすぐに仕事を再開した。だが今までのように体が自由に動かなかった。疲れも溜まりやすくなったようだ。まるで、残りの寿命を削っている気がした。：いや、そのとおりか。おそらく予定より早く、私の命の終わりはやって来る。ならその時まで悔いの無い人生を送ろうではないか。

それからエリーは入退院を繰り返しながらも仕事を続けた。

久しぶりの仕事だった。街一番の踊り子であるエリーの舞を見ようと多くの観客が集まっていた。

踊り始めた時だった。彼女は体に異変を感じた。踊れば、踊るほど苦しくなっていくようだった。観客に気づかれぬように必死に隠した。踊りきった、そう思ったと同時に彼女はその場に倒れた。

お客さんの騒ぎ声が聞こえる。死ぬんだなあ、と思った。恐怖心は生まれなかった。きつと、ずっと前から覚悟していたことだからだろう。人生に後悔が無い、なんていったら嘘になる。でも、ここに居る全ての人が私を見ていくくれる。そう、思うと不思議と満足感に満たされた。命の光が消えるその瞬間まで人々の視線を奪う、それってすごいことじゃないかしら？

「…お姉ちゃん」

妹が近くに居るのが分かった。

あなたを一人残してってしまうのは心残りだけど。

でも、私、幸せな人生だったわ。

だから、あなたも幸せな人生を送ってね。

もう声に出来ないから、伝えられないけど、

さようなら、愛しい妹……

昔々、とある国にとっても美しい踊り子がおりました。病弱であつても普通に生きることを願い、その命の終わりまで踊り続けました。そんな、彼女の名は……エリザベート

2章 麗しの舞姫（後書き）

2章終了です。
相変わらず暗いです。

3章 偽りの街娘

私、ナタリーはただの街娘。そして今は一人ぼっち。両親は数年前に死に、たった一人の家族だったお姉ちゃんも先日亡くなった。

お姉ちゃんは街一番の踊り子で葬式にもたくさんの方が来た。皆泣いていたけど、私は涙が出てこなかった。だってもうその時には、涙は枯れ果てていたから。

姉が死んでからもナタリーは仕事を続けた。しかし彼女はもう生きる氣力を失くしてしまっていた。

そんなある日のことだ。家の前で女の子が倒れていた。おそらく自分と然程歳も変わらないであろう女の子、そのまま放って置けないので家の中に連れて行った。

数時間して目が覚めた女の子にナタリーは尋ねた。

「あなた名前は？」

すると彼女はしばらくしてから

「…マリー」

と、だけ答えた。

「どうしてあんなところで倒れていたの？」

するとまた彼女はしばらくしてから答えた。

「家を出てきての。あそこにはもう居場所が無いから。…ねえ、もし良かったら私をここにおいて。私あそこにはもう戻りたくないの」

ナタリーは困った顔をした。

私は「いいよ」と言ってしまった。普段だったらそんなこと言わなかったと思う。でもお姉ちゃんが死んだ今、一人でこの家に居るのは耐えられなかった。

実は私の家は元貴族だ。しかし父が死んでからはただ家が大きいただけの一般人となってしまった。家族との思い出がいっぱい詰まった家。私以外もう誰も居ない家。そんな場所に居るのはたまらなく苦しかった。

一緒に暮らすようになって分かったがマリィはなかなか社交的で気さくな性格だ。しかし、恐ろしいくらい何も出来ない女の子だった。料理、掃除、洗濯、家事は何をしても失敗ばかり、その度に彼女は申し訳なさそうにしていた。

「気にしないでマリィ。これから出来るようになったらいいのよ」
「ありがとう。ねえナタリー？あなたはこの広い家にずっと一人ですんでるの？」

ナタリーは首を振った。

「ううん、数日前まではお姉ちゃんと一緒に住んでいたの。でもお姉ちゃんが亡くなってからは…」

「ごめんなさい、嫌なこと聞いて」

「謝らないで。ただ私が吹っ切れていないだけだから。でも本当はこの家に居ること自体辛いだけだね」

「解るよ。その気持ち」

うつむきながらマリィは言った。

「私もね大切な人が死んだの。そうしたら自分に居場所が無いような気がしたわ。誰も自分をちゃんと見てくれない。だから家を出

たの。」

そう話すマリーの顔は今まで見たことの無いほど苦しそうだった。

それから、同じ傷を持つ二人の少女は支えあいながらも共に暮らしていった。

だがある日その生活も終わりを迎えた。

家に帰ってきたナタリーは街で聞いてきたことをマリーに言った。

「マリー、今街中で軍人が人探しをしているそうよ」

「…人探し？」

「何でも高貴な家の令嬢を探しているそうよ」

すると真っ青な顔をしながらマリーは言った。

「聞いてナタリー。多分それは私のことよ」

「えっ!!」

困惑するナタリーの腕を掴みマリーは言った。

「お願いナタリー! 私の身代わりになって。私たちこんなに似ているんだものきつとばれないわ」

実はこの二人見間違えるほどよく似ていた。違うところといえば、ナタリーの方が多少髪の色が濃い事と瞳の色くらいだ。

「何を言っているのよそんなの無理に決まっているわ」

「大丈夫よ。記憶喪失ということにすれば誤魔化せるわ。それにあそこにはもう、私のことを心から思っていてくれた人は居ないもの。…私はもう帰りたくないの」

その時だ。

扉をノックする音が聞こえた。

彼女が家に帰りたくないように、私はどうしてもあの家を出たかった。

だから身代わりを引き受け、訪ねてきた軍人について行った。でも、連れて来られた場所を見て言葉を失ったわ。

ねえマリー、貴女はここでどんな人生を送っていたの？

ここは逃げ出したいほどの場所だったの？

3章 偽りの街娘（後書き）

3章が終了。

次で完結します。

最終章 真実を記すもの

今ここに全ての真実を記そう。

隣国との戦いが終わりを迎え、人々は喜んだ。

しかしその国の姫だけは、自分のせいで大切な人を死なせてしまったことを悔やみ絶望の淵に立たされていた。

彼女は気づいてしまったのだ。この城に自分の居場所がないことに。

城の人間は皆、彼女のことを恐れ、避けていた。あの側近だけが心から自分のことを見ていてくれた。

彼女は城を出た。

少量の宝石を握って出来るだけ遠い所に向かった。

そして国はずれの商業の街で力尽き、気を失った。

気が付いたとき彼女は一人の少女に助けられていた。

自分と似た姿をした少女と、自分と同じような傷を持つ少女と、

彼女は共に暮らし始めた。

ある日、軍人が彼女のことを探しに来た。

彼女は少女に身代わりを頼み、少女も引き受けてくれた。

数日経っても「姫が偽者だった」何て話は流れなかった。

彼女は安心したと同時に少女に「ナタリー」として生きるはずだ

った人生を捨ててしてしまったことを申し訳なく思った。
そう、少女はこれからこの国の姫としてしか生きられないのだ。

一人の女騎士が死んだ。

一人の踊り子が死んだ。

残された二人の少女が出逢った。

一人はこの国のよき女王となった。

一人は街で温かな家庭を築いた。

誰もあの時連れてきた姫が別人だと気づかなかった。

誰も本物の姫が街でただの主婦をしているなんて思いもしなかった。
た。

四人の人生が交わり物語が生まれた。

だがそんなこと誰も知らない。

過ぎ去ってゆく時が全ての真実を消し去ってゆくだろう。

いつか彼女たちの存在を誰も知らない日が来るだろう。

しかし彼女たちは確かにここで生きていたのだ。

ならばいつの日か誰かがこの真実に気づくことを願って、

今ここに私が記そう。

私の名はローズマリー………本物の姫なり。

最終章 真実を記すもの（後書き）

なんとか完結です。最終的になんか適当な感じの終わりになってしまいいし訳ない。

皆様はこれを読んで何を思いましたでしょうか？
それではまた別の作品で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1639k/>

どこかの国の物語

2011年10月6日20時07分発行